

神奈川の風



平成28年6月1日号

校長 吉江 明洋

< 横浜市歌 >

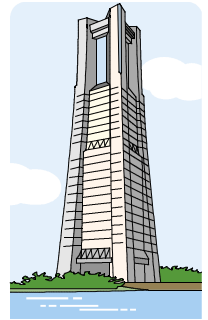
今回は、開港記念日シリーズ第二弾として毎年載せている「横浜市歌」の歴史についてです。

かなり以前になりますが、TV 番組「秘密のケンミン SHOW」でも「横浜で育った人なら誰でも歌うことができる」と、紹介されたことのある、みなさんになじみの深い「横浜市歌」。

その歴史を振り返ると、前号でもふれたように 1909 年(明治 42 年)7 月 1 日に横浜港の新港埠頭で行われた「開港五十年記念大祝賀会式典」の席で初めて披露されたので、今年で 107 年もの長い間、市民に歌い継がれてきた歴史を持つ由緒ある市歌なのです。

作詞が森林太郎(森鷗外：陸軍軍医でもあった小説家。「山椒大夫」「高瀬舟」作者)であることは有名ですが、作曲は東京音楽学校(現：東京藝術大学)の教師であった南能衛です。

横浜市が東京音楽学校に仲介を委託し、南が作った旋律の上に鷗外が歌詞をして完成させたものです。生徒は誰でも歌えるはずですが、歌詞が文語体なので、その意味が理解できているでしょうか。以下に現代文に訳して載せますので、これからは十分に意味を理解して歌いましょう。それでこそ横浜市民です。



ひろろ

ゆいしよ



(マシュー・ガルブレイズ)

わが日本の本は島国よ 朝日輝ふ海に

(わが日本は島国です 朝日に輝く海に囲まれる中に)

連なり時つ島々なれば あらゆる国より舟こそ通へ

・ペリ-

(島々が連なりそびえている国なので 多くの国々から船がやって来ます)

されば港の数多かれど この横浜に優るあらめや

(しかし、世界に港は数多くありますが、この横浜にまさる港はどこにもないでしょう)

昔思へば苦屋の烟 ちらりほらりと立てりし處

(昔の横浜を思い返せば茅葺きの粗末な家から炊事の煙がちらほら立つ寂しい所でした)

今は百船百千舟 泊まる處ぞ見よや

(しかしご覧なさい、今や多くの船が停泊する活気ある港となりました)

果てなく栄えて行くらん御代を 飾る寶も入り来る港



(果てなく栄えてゆくこの国をいろど彩るぶんぶつ文物(宝)が、今日もこの横浜港から入ってきます)